

「やる気応援奨学金」レポート

貧困削減支援の最前線で活動
異文化・相互理解の難しさも

法学部国際企業関係法学科四年 大槻 麻莉子（私立中央大学附属高校）



私は二〇一四年前期「やる気応援奨学金」でフィリピン・セブ島に行かせていただいた。平日は語学学校で英語を学び、休日は子供の教育支援を行っているNPOにて子供たちの情緒教育や食事の提供などの活動に参加した。

語学学校で歴史認識の差を知る

語学学校で日本人以外の人々と話す時に常を感じたことは歴史認識の差である。先生は日比の関係性や戦争時代の歴史について色々な話をしてくれた。例えば、その先生の故郷でもあるフィリピン南部ミンダナオ島で、第二次世界大戦中に日本兵が村人を襲い、その

人肉を食らったことは、現地では知らぬ人がいない周知の事実であるということだ。彼女は過去の日本軍の残虐性に疑問を投げつつも、「みんな過去に生きていくわけではない。今に生きていく。現在、多くのフィリピン人が経済にフォークラスしているように、過去は過去として、今の関係を前向きに考え、進むべきだ」と言ってくれた。また、仲良くなった韓国人の男子学生に、日韓関係についてどう考えているか尋ねたところ、それまで楽しく一緒に御飯を食べていたのだが、いきなり「君は歴史のすべてを知っているの？」と質問された。「自分なりに勉強してきたつ

もりだが、すべてではないと思う」と答えたら、「それならば、ノークメント」と言われ、私の質問は突っぱねられてしまった。私が想像していた以上に反日の感情を感じられ、軽い気持ちで聞いたことを後悔した。しかしその後、再び日韓関係の話になった時に、以前より距離を縮めることが出来ていたので、彼は多くの話をしてくれた。中には初めて耳にするものもあった。

これらの経験を踏まえて、こちらが事実を知らなければ相手は全力で話す行為をやめてしまうという知識が基礎にあって、初めて対等に対話しても

らえると実感した。しかし、私にはそれが足りず悔しい思いをした。次にもこのような機会があれば、国際政治のみならずさまざまなトピックで、私なりの主張を持って、相手の意見にも耳を傾け、相互理解を深められるように勉強に力を注ぎたいと思った。

NPO活動で支援の厳しさ痛感

公園で子供たちとスポーツを楽しんでいると、輪の中に入らない子が数人いた。近寄って「どうしてみんなと遊ばないの？」と聞くと、その子は「I'm not supported.」と言った。私は初めその意味が理解出来ず、NPOの方に「一緒に遊んではいけないのでしょうか」と聞くと厳密には許されないという。子供たちはアクティビティと一緒に付いてきてしまうけれど、そのNPO法人でサポートする子供の定員が決まっており、財源上、

全員に支援することは出来ない。お菓子をもらえるのも、輪になって自己紹介出来るのも、特定の子供たちだけだ。支援の仕組みとしては、日本人サポーターが子供たちの学費・制服代・交通費などを継続的に支払い、その仲介をNPOが行う。この状況は考えてみれば当然起こり得ることだが、支援を必要としている人々に提供されるその支援の輪にさえ入れない子供から大きくなっていく時悪影響

を及ぼさないだろうか、など私はさまざまな考えを巡らせ、それはとどまることがなかった。NPOについては以前から机上の勉強はしていたので、今回は「自らの体験でNPOの運営や実態を知る」ということが一つの目標になっていたが、想像以上に厳しい現実があり、日本のNPOの態勢の限界を感じる出来事でもあった。

女性の自立支援をする企業

帰国までの滞在期間、私は一度



私の得意なチアダンスを歌とダンスが大好きな子供たちに教えて一緒に踊った

たりとも嫌な思いをしなかった。危機管理の意識は日本にいる時よりも高く持っていたが、私が出会うことの出来た人々が大変親切だったからである。例えば、タクシ―に乗っていると、急にロックを掛けられたので驚いたら、「君が携帯をいじっているから危ないと思って鍵を掛けたよ。僕は仕事中に六回も強盗にあったことがある」と言われた。タクシ―などでぼつたくりが多いと言われているが、その経験もしなかったし、むしろ負けてくれさえた。NPOの子供たちに街に出ると告げれば、「リュックサックはおなか側に持って携帯はちゃんと奥にしまつて！」と注意してくれるし、学校の先生も親切で、街中の人はみんな陽気でにこにこ笑い掛けてくれて、なんてすてきな国なのだろうという思いが胸にあふれた。しかし、この国のイメージは帰国前日に、一人の日本人女性に出会うことで一八〇度変わった。

その方は、ダイビングショップと手作りせっけんの工房を営んでおり、そのせっけん工房は、私

がお世話になっていたNPOの子供たちが大人になった時の就労先にもなっている。彼女は自分の手で一から会社を起業し、経営を成り立たせていた。しかし、二〇一〇年、彼女はフィリピンで築き上げてきたすべてを失った。ダイビングショップの従業員が店と船を盗み、その額は二〇〇万円に上ったのである。「目の前で船が盗まれていくのを見ることよりも、それまで二〇年間付き合ってきた人に裏切られたことのほうが辛かった」と彼女は私に話してくれた。ダイビングショップは再スタートを切ることが出来たが、現在でも、せっけん工房の従業員に失望させられることが多いという。どんなに一生懸命に接していても、正式な形で辞めていった子はいないということだ。その女性たちは前述したように、日本人のサポーターからの学費支援で就学・就職してきたものの、「日本人はお金持ちだから支援してくれて当たり前、お金を出してほしいと頼めば大学に行くことが出来るし、こんな所で働かなくてももっと良い職業に就

ける」と文句を言って逃げてしま
うのだ。経営者である女性は、彼
女らは「日本人と接する間にてん

ぐになつてしまった」と話す。支
援され続けた子は、支援されるこ
とに慣れてしまう現状が、確かに
そこにはあった。

だからこそ、彼
女は従業員に厳
しく接し、社会
はそんなに甘く
ないと教えてい
るのだろうか？と理

解出来たが、固
定観念を持って
しまった大人を
育てることは、
幼い子供を育て
るよりもずっと
難しいことだと
思った。

また、支援を
行う側の立場の
問題点も知るこ
とが出来た。あ
る日本人サポー
ターは、フィリ
ピンに来た際、
「ここでは何の
VIP待遇もし
てくれないんだ

ね。ほかの国では村
長や子供が空港に来
て歓迎してくれたり、
良い部屋に泊まらせ
てくれるのに」と言
い、翌年から支援を
やめたという。つま
りは彼の支援は自己
満足に過ぎなかつた
のだ。

ここですべてを書
ききることは出来な
いが、とにかく支援
の現場の最前線では
私の想像をはるかに
超える問題が絶えず
起こっており、それ
は利己心や偽善をは
らんでいた。そんな

状況は変わらなくても彼女は支援
を続ける。絶対に苦しいはずなの
に、それを語る姿からは何の気負
いも感じなかったもので、それはな
ぜか尋ねると、「気負いもなければ
真剣さもないよ。困っている人の
ためにどうにかしなきゃ！と思っ
ている人はきっと早く太く成功す
ると思うけど、壁にぶち当たった

車輪を足でこぎ、その回転の摩擦を利用して金属を研磨
する



時やめるのも早いかも知れない。
細くても長く続けること、偉くな
らず、現場を知り続けることが大
事」と語ってくれた。支援の現場
は長期的に行つて初めて成果が結
実するものだと思うので、心から
納得出来る意見だった。ほかにも
何時間もお話を伺つて、フィリピ
ンの人々が持つ独特の気難しさと

将来の夢を絵に描いて発表し合った



いった国民性を知ったり、逆に彼らが良かれと思ってくれてくれることが、私たち日本人には理解出来なかったりと、協働していく難しさを知った。共同体に溶け込もうと努力してきたものの、私はフィリピン人社会の「部外者」にすぎないことを痛感した。しかし彼女は、「二〇年以上一緒に住んでいてもすべてを分かり合うことは出来ない。分かり合えた部分だけを共有していけば良い」と教えてくれた。これは、自分が今いる共同体

から異なる共同体に飛び込んで何か成そうとすれば、ビジネスでも市民社会でもどの現場でも、必ず起こる相互理解の難しさを表していると思う。それを肌で感じることの出来る経験になった。

活動を振り返って

一年前、個人的にフィリピンにボランティアに行った際には、短期間ということもあり、表面上の世界しか見ることが出来ず、もやもやした気持ちだけが残る旅だった。

これは、自分が今いる共同体から異なる共同体に飛び込んで何か成そうとすれば、ビジネスでも市民社会でもどの現場でも、必ず起こる相互理解の難しさを表していると思う。それを肌で感じることの出来る経験になった。

た。今回は五感・六感を駆使してこの国の文化、歴史、観念、宗教、政治を知ることが出来、一年前から感じていた疑問がするするとはどけ、初めて一つの国を深く理解することが出来た。しかし、前述した日本人女性との出会いで、私はフィリピン社会の「部外者」にしかすぎないと知ったことをきっかけに、異文化理解はそう簡単なことではない、すべてを分かりきることとは出来ないと痛感した。それでも極限まで人に寄り添うことは出来るし、すべてじゃなくても分かり合えたことだけ共有していければ良いということを知ると、これから私が社会に貢献出来ることは限られているとしても、やらないよりはましで、より有効な手段を考えていけば良いと前向きに考えられるようになった。

この大切さを改めて実感したが、それと共に、机上で養うべき知識が圧倒的に少ないことも痛感した。これからは両面から勉強していきたい。

私には学力も知識もなかったけれど、「やる気応援奨学金」に対する、頑張りしたい、挑戦したい、という気持ちは人一倍あったと思う。この気持ちを買って機会を平等に与え、私たちの未来に投資してくれる、こんなにも素晴らしい制度はここにしかない。先生方は自主性を重んじ、私たちが自分の力で成し遂げられるよう、絶妙なところまで手を差し伸べ、助けてくださった。そのおかげでこの留学で大きな達成感やさまざまな経験を得ることが出来、次の課題も見えてきた。支えてくださったすべての方々にこの場を借りて感謝申し上げます。なお、フィリピン渡航は、さまざまな場面で危険が伴うリスクがあり、事前の準備調査を十分に行うと共に、渡航中においても高い危機管理意識を持って過ごす必要があることを申し添えておきたい。



仲良くなった子供たちとは今でも連絡を取り合う

私は分からないことがあれば、失礼なことであってもとりあえず直接聞いてしまうし、行動してしまいが、今回それで思わぬ収穫があったり、新しい出会いを広げることが出来た。体で感じて学ぶことが多かった私は、行動を起こす

私には学力も知識もなかったけれど、「やる気応援奨学金」に対する、頑張りしたい、挑戦したい、という気持ちは人一倍あったと思う。この気持ちを買って機会を平等に与え、私たちの未来に投資してくれる、こんなにも素晴らしい制度はここにしかない。先生方は自主性を重んじ、私たちが自分の力で成し遂げられるよう、絶妙なところまで手を差し伸べ、助けてくださった。そのおかげでこの留学で大きな達成感やさまざまな経験を